

2020年6月10日
古代文化調査会

京都所司代上屋敷跡発見の建物跡と池及び木樋跡

1 説明

古代文化調査会（民間調査団：代表・家崎孝治）では、江戸時代に二条城の北側に設けられた所司代跡の発掘調査を今年1月14日から実施しています。

今回の調査では、平安京の大路跡や弥生時代の溝跡など様々な時代の遺構・遺物が検出されていますが、江戸時代の所司代上屋敷（政庁）跡からは、園池跡が初めて見つかり、池底から木樋が発見されました。また、残された所司代の絵図から、上屋敷の表玄関の西側にあった堀中門跡や馬を繋いでおく馬立所跡、射場跡などが見つかり、所司代上屋敷の実態が徐々に明らかになってきています。

なお、現地説明会の開催については、新型コロナウイルスの感染の恐れがありますので、今回は実施しないことになりました。

2 住所 京都市上京区丸太町通黒門東入藁屋町536、536-71・85・87・93番地

3 調査機関 古代文化調査会（代表者 家崎孝治）
（担当調査員）小松武彦・水谷明子・梶川徹夫

4 調査期間 令和2年（2020）1月14日～12月25日（予定）

5 調査面積 4,745㎡（予定）

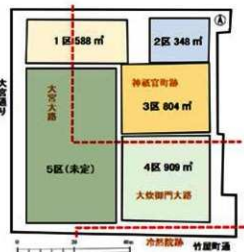
6 調査原因 開発事業に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査

7 該当遺跡 ①平安時代 平安京左京二条二坊跡（神祇官町跡・大宮大路跡・大御門大路跡・冷然院跡）
②江戸時代 京都所司代跡
③その他 二条城北遺跡（縄文～弥生時代の集落跡）

8 現在までの調査成果

1・2区は調査完了し、現在は3・4区を発掘調査中です。

- 1区 明治期の溜池、所司代の園池（池跡と木樋跡）と西限溝跡、大宮大路の路面、弥生時代の溝跡など。
2区 所司代関係の建物跡、平安時代の神祇官町井戸跡や土器跡、弥生時代の溝跡など。
3・4区 所司代上屋敷内の建物の西・南付近を現在調査中。



調査区の劃分図



京都所司代（上・中・下の各屋敷）の位置と調査場所

9 京都所司代の歴史

所司代とは江戸幕府の職名で、それ以前、16世紀後半の戦国末期に織田信長や、その後の豊臣秀吉が、京の支配、治安維持のために、室町幕府の侍所の長官である所司の代理の官に就いて設けられていました。

1600年以降、江戸幕府が成立すると、二条城の監督、京の制圧、朝廷や公家の監視、西日本諸大名の監視のほか、五畿内および近江、丹波、播磨の8箇国の民政を総括するため、二条城の北側に設けられました。

関ヶ原の戦後後の1603年に徳川家康が征夷大将軍に任じられ、江戸幕府が成立すると、正式に板倉勝重や子の重宗が京都所司代に任じられて以後、明治に至るまで56名の所司代が任命されています。（江戸幕府成立前には奥平昌昌などが京都治安維持のために一時所司代に就任）定員は1名で、3万石以上の譜代大名から任命され、役料1万石が給されて与力30騎（後50騎）同心100人が付属し、老中につぐ要職で、江戸時代初期は、徳川家康ほか秀忠、家光ら歴代将軍が度々京へ上洛し、京都所司代が重要な役割を果たしました。

幕府支配の一元化が進んだ1688年には、京都支配などの権限を京都町奉行に譲つて以降、江戸の老中への出世の通過点となり、地位のものが高くて幕政上の政治力は急激に低下しました。幕末に至つては、所司代の無力さが露呈し、幕末の動乱期は、所司代だけでは京の治安を維持するのは困難となり、その上部の最高機構として京都守護職が置かれ、所司代はその下に入り、やがて明治維新を迎え、慶応3年（1867）12月に廃止されました。

10 京都所司代があった場所

京都所司代は、二条城の北から西北にかけての広大な敷地を有し、当初は上屋敷・中屋敷（堀川屋敷）・下屋敷（千本屋敷）の三個所に分かれていました。江戸時代初期は所司代が住んだ私邸を下屋敷と呼称していましたが、付属屋敷が増えたため、下屋敷は中屋敷と名称が変わり、勤番者やその家族の居住区域となりました。

今回の調査は、政庁（所司代の居所）であった上屋敷跡で、東限は猪熊通り、1700年の「所司代屋敷絵図」によれば敷地は凸形で、面積は3,674坪でした。その後、元禄16年（1703）以降に、周辺民家が取用されて西限が日暮通りまでとなり、敷地は東西122間半、南北81間（敷地面積は8,799坪）に拡張されています。

上屋敷跡は、現在の通り名では東限が猪熊通り、北限は丸太町通り、西限は大宮通り、南限は二条城馬場通り（竹屋町通）で東西約227m、南北約150mの大規模な敷地を有していました。

11 京都所司代関係年表

- 慶長6年（1601） 江戸幕府成立後、板倉勝重が所司代に就任、慶長8年（1603）与力30騎、同心100人を配属。（江戸幕府成立前には奥平昌昌や加藤正次・松田正行がいる。）
- 元和5年（1619）5月 板倉勝重が辞し、子の重宗が所司代に就任する。
- 寛文5年（1665） 京都奉行が置かれる。
- 寛文8年（1668） 東・西町奉行制が敷かれ、京都の民政は所司代から町奉行の手に移る。
- 延宝元年（1673） 寛文13年の京都市大火で所司代上屋敷・堀川屋敷などが焼ける。
- 元禄13年（1700） 「所司代屋敷絵図」が描かれる。（中井家所蔵）
- 元禄16年（1703） 上屋敷周辺民家が取用され、北部と西側の町まで取り込み敷地が拡大。（当初の2.4倍）
- 天明8年（1788）1月 正月晦日に発生した天明の大火（どんぐり焼け）により焼失か？政府機能は東山高台寺に置かれる。（上屋敷と中屋敷の復旧が金額209萬300匁で行われている。）
- 寛政11年（1799） 天明8年の焼失後に「所司代上屋敷絵図」が描かれる。
- 文政7年（1824）12月 「所司代上御屋敷内西高瀬新規川筋図」が描かれる。（堀川の水を二条城の北から千本通に沿って南流させ、西九条で堀川に交流させる計画。この西高瀬川の計画は西院村の反対で未達成か。『京都の歴史7』39年後の1863年に掛川から材木や米などを運ぶために開削された。）
- 慶応3年（1867）12月 所司代は廃止、土地はしばらくの間は空地となっていた。
- 明治3年（1870） 所司代上屋敷のあった場所に、わが国初の京都府中学校が開校するが、翌4年に移転。跡地には養蚕場が開設され、生産された絹糸は西陣織の発展に大いに寄与した。これ以後、跡地周辺は民有地となり民家が建てられるようになる。
- 明治14年（1881） 待賢小学校が所司代跡（現在地）の北域に移転する（明治2年（1869）10月6日に猪熊通下立売下の大宮町に創設された待賢小学校（上京第1番組小学校）が生徒増加のために現在地へ移転。このときは養蚕場は廃止されている。）

12 調査で見つかった遺構

これまで調査地の東側でも所司代跡の調査が行われていますが、明確な検出遺構は少なく、今回、検出遺構と所司代を描いた江戸時代の絵図との照合により、初めて建物の位置や配置などが明確になってきました。

1区では所司代初期の西限溝と所司代の池が検出されています。2区では所司代のもとと考えられる明確な遺構は検出されませんでした。3区では、柱跡など同時期の遺構が検出されています。

4区では、所司代上屋敷の表門に続く長屋跡や塀中門、馬立所、射場跡などの遺構と、明治期に掘られた溜池の排水溝が見つかっています。

1・2区の調査を終え、現在3・4区の調査を行っています。3・4区は、大規模な所司代上屋敷の西南部で、ここは玄関や大書院・小書院など主要な建物があった場所です。

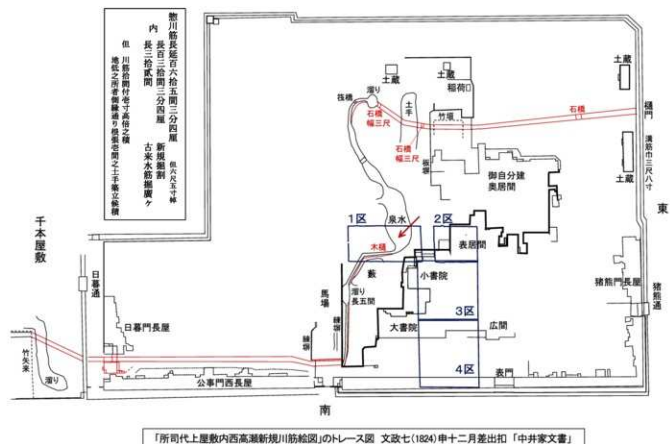
(1) 1区（池跡と木樋遺構）

1区の東側から所司代の園池跡が初めて見つかりました。池の西岸には緑色片岩の景石が据えられ、南岸にも護岸石が並べられていました。池底は漏水防止の叩きが施され、水深は30cm前後で浅い池です。この池は、文政7年（1824）の「所司代上屋敷内西高瀬新規川筋絵図」（中井家蔵）に泉水と書かれた池と考えられ、調査では池の南西部（東西9.1m、南北8.5m）を検出しました。

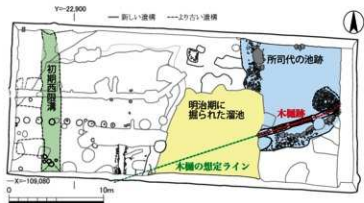
この池の南岸近くの池底下から、東北東から南西部に水を流す木樋が見つかり、浅い部分と深い部分があり、全長で9.5mを検出しました。この木樋の東・西側は、明治期の溜め池や現代攪乱のため不明です。

木樋上の池底（漏水防止面）の石敷が元どおりに復元されていることから、木樋が作られたのは池と同時期かそれ以降と考えられます。

これまで京都市内で見つかった木樋の検出例は、平安京跡では右京八条三坊七町跡（平安時代）の西大路小路



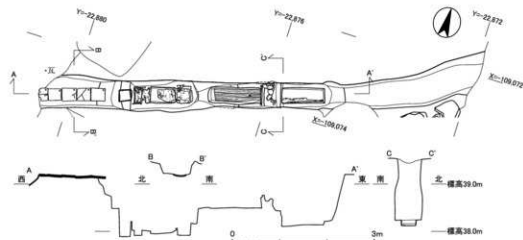
文政7年（1824）の所司の園と泉水（池）の発見位置（矢印）



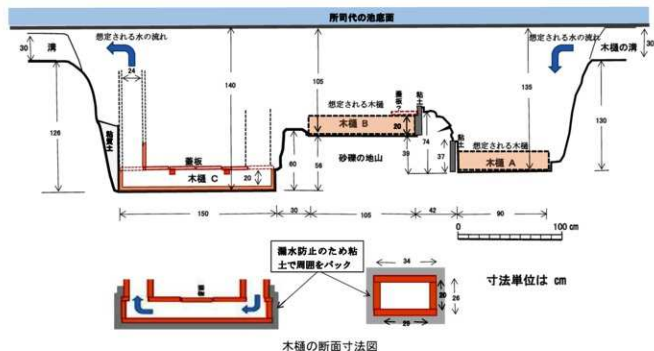
調査区1区平面図（1/400）



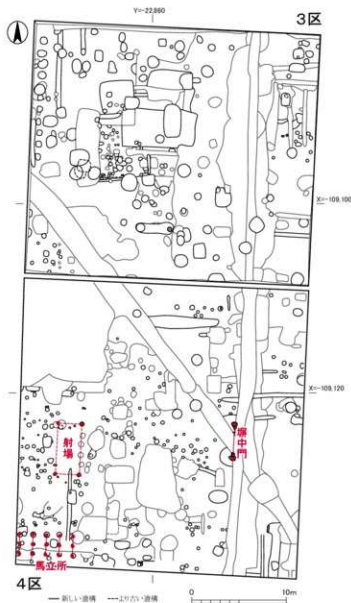
所司代の池跡と木樋跡（東から）



木樋遺構の平・断面図（1/80）



木樋の断面寸法図



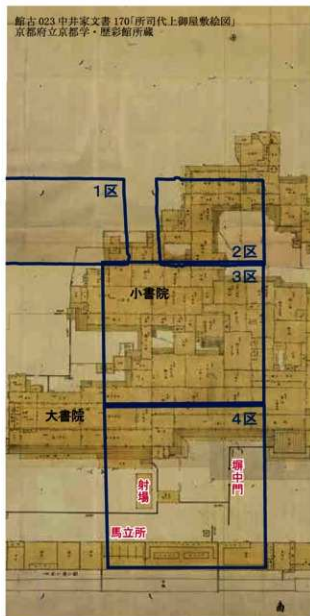
3・4区平面図 (1/400)

校の例や、左京八条三坊跡(平安時代)、左京五条一坊九町跡(安土桃山)、水垂遺跡(鎌倉・室町)、伏見城跡(江戸初期から前期)、現在の二条城内の白書院北方でも見つかっています。

しかし、この6箇所の木樋検出例のいずれも、このような複雑な構造をした木樋ではありません。また、東京における江戸城下の大名屋敷跡の調査例でも木樋遺構が多数見つかっていますが、同じような複雑な構造を持つ木樋の例は見当たりません。

(2) 3区

3区では、第1面で天明の火災(天明8年(1788)跡、建物跡、焼けた建築部材など)が見つかりました。第2面でも火災後に整地された面があり、建物跡と付随した雨落ち溝、廊下を貫る通路、井戸跡などが見つかっています。現在、第3面で寛文13年(延宝元年)(1673年)の火災面を調査しています。



絵図との対応



3区第2面全景

(3) 4区(所司代上屋敷の建物遺構)

① 御中門

4区の南東側で門跡の遺構が見つかりました。規模の大きな掘立柱の穴を南北で二箇所検出しました。地中約1mまで深く掘り下げられ、底には礎石が据えられており、天明大火の焼土を切り込むようにつくられています。

この門は、所司代の南門を入った玄関の西側、目板瓦塀に取り付く屋根のない冠木門とみられ、四脚門と違って単独で掘り取り付くために地中深く柱を埋めた掘立柱構造です。柱間寸法は二間(約3.6m)あり、西側に開く扉が取付けられていたと考えられます。

この門跡を定点として、所司代の絵図と比較することによって、他の建物の位置も予測することができる遺構として重要な発見になりました。

② 馬立所跡(馬をつないでおく建物)

絵図には、表門の西側に続く長屋構造の建物の一面に馬立所と書かれ、馬を繋いでおく5箇所の区画が描かれています。今回の調査では現在のところ4箇分の区画を検出しました。掘立柱建物で東西6.2m、南北2.5mの大きさで、1頭の馬の区画は1.4m×2.1mです。

なお、馬を繋いでおく建物は、清水寺の門前北側にある重要文化財の馬駈が有名です。

③ 射場跡(弓道場)

武士が弓の練習をする場所で、絵図には馬立所の北側には射場が描かれています。今回検出したのは矢を射る建屋の柱跡で、柱間は東西2.4m、南北5.4mの大きさで、西方向にある礎(的をかける場所)に向かって開けていたと考えられます。



洛中洛外図(田方家旧蔵本) 1614~1617年



洛中洛外図(林原美術館本) 1615~1617年

絵図に描かれた京都所司代上屋敷(京都府立総合資料館「洛中洛外図の世界」から転載)



門跡を示す掘立柱の穴



馬立所の柱穴